



CONTENTS

地域の病院に想う	山本 寛・武田輝規	2
教授就任	尾関祐二・芦原貴司	5
教授退任	村田喜代史	8
私の仕事場	寺本敬一・佐治雅史	10
開業苦労ばなし	小河孝夫	13
海外からのメッセージ	菅原一樹・十川 博	14
私のひとりごと	松村一弘	17
同期会 10年	高橋香織・高橋雪輝・山下公子	18
20年	佐伯啓介・佐藤浩一郎・長井美樹	20
30年	井上慶郎	22
支部会 鹿児島支部	迫田 悟	23
訃報	訃報	23
事務局から	事務局から	32

地域の病院に想う

地域の中で、生活に溶け込む医療を。

この度、湖都通信に寄稿させていただくことになり、有難うございます。折角の機会なので、まずは、自己紹介をさせていただきます。私は、地元滋賀に生まれ、滋賀に育ち、膳所高校を卒業し、滋賀医大に入学しました。平成元年卒の9期生です。卒業後は、滋賀医大第二外科に入局し、1年半の研修の後、大阪の北野病院、滋賀のヴォーリズ記念病院に勤務した後、滋賀医大の大学院に入学し、解剖学講座の藤宮峯子先生(現札幌医科大学・解剖学講座・教授)の下、消化管運動の研究をさせていただきました。縁あって、大学院を中退し、解剖学講座・故前田敏博先生の助手として研究を継続し、博士号を取得させていただきました。

その頃興味を持っていた神経・内分泌・免疫関連を勉強するため、ハーバード大学ベスイスラエルデコネスメディカルセンターへ3年間留学し、Joel K Elmquist先生の下で研究をさせていただきました。留学時のテーマは、現在糖尿病治療薬として用いられているGLP-1の中枢・末梢作用に関する研究でした。まさにこの分野は、私が現在ライフワークとして取り組んでおります肥満・糖尿病に対する外科手術、いわゆるバariatリックサージェリーあるいはメタボリックサージェリーにつながるものです。帰国後、外科学講座・谷徹先生の下で、上部消化管外科を担当させていただき、食道・胃外科を引き継ぐとともに、肥満外科を立ち上げることができました。

その後、草津総合病院で2年半勤務し、2019年1月、甲南病院に赴任いたしました。

甲南病院は、磯矢良会長が、昭和39年8月1日に、私立甲南病院として開設され、昭和42年10月には医療法人社団仁生会を設立されました。開院当初からの一貫した思いは、『慈しみ、思いやりのある医師、病院でありたい』ということであつたと聞いております。開院55年となる本年7月末をもって、磯矢会長が勇退されますが、その思いは、脈々と職員に受け継がれています。前院長の渡田正二先生は、私の研修医時代の恩師ですが、2018年闘病の末亡くなられ、病院葬がしめやかに執り行われました。私も、後輩の一人として参列させていただきましたが、その際の葬儀委員長の甲南病院理事長・古倉みのり先生はじめ甲南病院のスタッフの皆さんの対応に、何とも言えない奥ゆかしさと凛とした強さを感じ、私にとって、一期一会と言える大変貴重な機会でした。ちょうどその時、私は甲南病院から入職のオファーを頂いており、甲南病院との不思議なご縁を感じずにはおれませんでした。後日談になりますが、甲南病院では、これまでに小堀光實執行様をはじめ比叡山延暦寺のご住職においでいただき、院内法話会を開催しています。今年の7月で20回目を迎えるそうですが、渡田先生の葬儀には何名ものご住職にお参りにおいでいただいたそうです。院内法話会では、法話の後



院内法話会



甲南病院 院長補佐
山本 寛 (医9期)

にご希望の患者さんの何人かに住職が病室でお経を上げていただいています。初めて聞かれた方は、そのような光景を想像され、驚かれるかもしれません。しかし、古倉先生は、患者さんに病気や老い、そして死が現実のものとして忍び寄ってきた時の不安や絶望を想像したときに何が救いになるのかと考えた結果、日本人の生活に溶け込んでいる仏教・お坊様を頼りにすることを選ばれたのだそうです。地域包括ケアシステムが叫ばれる中、医療は単独で存在するのではなく、地域の中で、生活に溶け込んでいく必要があると考えます。

卑近な例になりますが、2年前、私の母が胸腰椎の圧迫骨折を続けて2度起こしてしまい、手術治療を受けました。それまで元気だった母ですが、急激に弱ってしまいました。本当に突然の出来事でしたが、母も77歳で様々な健康障害が出てフレイルは忍び寄っていたのです。幸い私どもは5人の兄弟がおり、主治医の先生や病院のスタッフの方々にお世話になりながら皆で協力して、母の介護やサポートに就くことができ、お陰様で現在母は一人で生活できるまでに回復させていただきました。本当に感謝しております。更にこのことがきっかけで、このような病気もそして死もいつ降りかかってくるやもしれないことを、この時しっかりと認識することができました。誰にとっても、死は避けて通ることができないものです。一人一人の人生で最も大切な出来事の一つである死、そして病

気に直面した患者さんに、治療と癒しを提供できる、甲南病院はそんな病院でありたいと思っています。

平成の時代が終わり、令和になりました。先日、トランプ大統領が訪日されたとき、雅子皇后様の神対応をソフトパワーという言葉で、ニューヨークタイムズはじめ米メディアが紹介しました。天皇陛下を立てながらも、優しく温かみのある笑顔、美しく上品な立ち居振る舞い、これまでの外交官としてのご経験から、通訳を介さずにリラックスしたムードで、トランプ大統領夫妻と堂々と会話されている様子を賞した記事です。ソフトパワーとは、クリントン政権下において国家安全保障会議議長、国防次官補を歴任したハーバード大学のジョセフ・ナイ教授の提唱した概念で、軍事力や経済力などの他国を強制し得るハード・パワーと対置する概念で、その国の有する文化や政治的価値観、政策の魅力などに対する支持や理解、共感を得ることにより、国際社会からの信頼や、発言力を獲得し得る力のことです。

分野もスケールも異なり、大上段に構えすぎかもしれませんが、甲南病院は、病院のそして職員のソフトパワーを研鑽し、安心・信頼・満足を得られる医療を提供でき、かつ優しさを備えた癒しの病院でありたいと思い、職員一同、頑張っております。今後とも、皆様方のご支援・ご鞭撻のほど、どうかよろしくお願い申し上げます。



医療と宗教の協働 (患者さんを見守る古倉理事長と延暦寺僧侶)

地域の病院に想う

2

科学の目を持った
臨床医を目指して

湖東記念病院 心臓血管センター長

武田 輝規(医16期)



皆さんこんにちは。滋賀医科大学16期生の武田と申します。私は1996年に旧第一内科(現 呼吸循環器内科)に入局しました。ちょうどその頃、循環器領域では冠動脈インターベンション治療(PCI)が成長期の真っ直中であり、その劇的なデバイス進歩と治療効果に魅了され、どっぷりとカテーテルの世界にのめり込むことになりました。

大学での研修後、市立長浜病院、岡村記念病院にて素晴らしい指導医や同僚に恵まれ、2006年からは現在の湖東記念病院にてカテーテル治療の責任者を任される立場となりました。その時代は薬剤溶出性ステントを初めてとする各種デバイスの改良によりPCI全盛期の様相を呈しており、私も同期入局の川會順先生とともに今では広く普及している親子カテーテルという新しい概念のカテーテルデバイス開発を行い、国内外を問わず多くのインターベンショニストと広く深く関わりあいをもつ絶好の機会に恵まれました。また、デバイスの開発を通じて、今まで以上に医療、特に安全面に対する責任の重大さを実感するようになり、忘れかけていた科学的な視点の重要性にも気付くことができたように思います。

湖東記念病院に赴任後、データベース構築にもものめり込み、全ての心カテ/心リハ/心CTに関するデータ蓄積を開始しました。独学でのファイルメーカーデータベースの

ため決してスマートなものではありませんが、臨床データとして必要十分な項目を網羅し、あくまでも臨床にフィードバックできることを意識し、誰でも集計データや臨床成績がリアルタイムで確認できるように工夫を施しました。データ入力に関しては、医師だけでなく、多職種のパラメディカルスタッフ皆が関わることによって、医師の負担を増やすことなく、永続的なデータ蓄積が可能なワークフローを導入することに成功しました。昨年度はこの10年間にステント治療を行った約3000名に予後調査アンケートを送付させていただき、より精度の高い長期データを得ることができました。これらの結果は、毎年行っている市民公開講座にて地域住民への啓蒙活動にも活用しています。この数年は滋賀県での多施設共同研究にも取り組んでおり、昨年は恩師である和田厚幸先生と欧州心臓病学会(ESC)で発表できたことも良い励みとなりました。

御存知のように日本は高齢化社会を迎え、循環器領域においても高齢者心不全/認知機能低下/腎機能低下/高出血リスク/フレイル等々さまざまな問題に直面しております。変わりゆく時代に何を考え、どのような医療を行うべきか、臨床医としてこれからも学び続け、科学の目を忘れないようにしたいと思う今日この頃であります。



和田厚幸先生とESC2018(ミュンヘン)にて



湖東記念病院の仲間達(カテ室にて)

教授就任
ごあいさつ

教授就任の挨拶



滋賀医科大学 精神医学講座 教授
尾関 祐二 (医13期)

平成31年3月1日付で滋賀医科大学精神医学講座の教授を拝命いたしました医学部13期生(平成5年卒)の尾関祐二です。この度は、このような挨拶の機会を与えて頂きました皆様に感謝申し上げます。

私が精神科医の道を人生の選択肢として考えるようになりしたのは、高校生の頃に遡ります。筒井康隆の文章を通してフロイトの存在を知り、この2人の人物によって人の不思議、複雑さ、難しさをより具体的に考えるようになりました。自然科学的手法で「脳」を説明できれば、人生と人類の悩みが「科学的に」解消されるのではないかと誇大な思いを持った時期でもあります(当然のことながら、こうした考えには小林秀雄を始め多くの批判があります)。

滋賀医科大学精神医学講座の門を叩いてからは高橋三郎初代教授の薫陶を受け、現代精神医学の全体像を身にしみこませることが出来たと考えております。そののち同門の大先輩である山田尚登前教授に至ります歴代の教授(加藤進昌教授、大川匡子教授)、ジョンスホプキンス大学澤明教授、国立精神神経医療研究センター功

刀浩部長、3期生の下田和孝獨協医科大学教授をはじめ、多くの諸先輩方、頼れる同期や後輩の先生達からも強い影響を受け、現在の自分が形作られました。

現在、神経科学の進歩と共に、「こころ」と「物理的な脳」の距離は多少縮まったかもしれません。しかしそれと同時に「純粋な」自然科学ではないが、地道に発展しました精神医学的手法を進めれば、人の本質をある程度つかめるのではないかとまたもや誇大な思いが芽生えつつあります。

精神医学は統合失調症や気分障害のみならず、睡眠障害、小児や老年期、妊婦・周産期特有の状態、更に物質依存など対象疾患は幅広く、司法や行政、産業衛生など必要とされる場面は日々増加しています。これら状況に対処するべく、人材の育成、研究の推進と地域の体制作りなどを粛々と進めて、困難が少なく前向きな環境、地域社会を作ること少しでも貢献できればと考えています。当然ではありますが皆様のご協力無くてはこうした思いを進めることは難しくなります。つきましては皆様のお力添えのほど何卒よろしくお願い申し上げます。



【略歴】

- 1993年 滋賀医科大学卒業、同大学医学部附属病院精神科 研修医
- 1995年 滋賀医科大学大学院入学
- 1998年 大学院退学、滋賀医科大学精神医学講座 助手
- 2001年 ジョンスホプキンス大学 post-doctoral fellow
- 2003年 復職した後、講師(学内)
- 2006年 国立精神・神経センター 神経研究所 疾病研究第三部 第一室長
(現:国立研究開発法人国立精神・神経医療研究センター)
- 2008年 獨協医科大学精神神経医学講座 准教授
- 2019年 滋賀医科大学精神医学講座 教授 (現職)

教授就任
ごあいさつ

教授就任ごあいさつ



滋賀医科大学 情報総合センター・医療情報部 教授
芦原 貴司 (医16期)

このたび、令和元年6月1日付けで、滋賀医科大学情報総合センターの教授に就任いたしました。私は本学医学部医学科の16期生で、コンピュータクラブのOBです。本学の創設当時に父が第1病理でお世話になっていたこともあり、私は子供時代を本学の職員宿舎で過ごしましたので、本学との関係は40年以上にもなります。

情報総合センターは、滋賀医科大学とその附属病院におけるあらゆる情報を統括するための新たな枠組みとして、平成30年4月に誕生しました。昨今、世の中が情報化社会へと飛躍的な進歩を遂げるなか、大学と附属病院の間のシームレスな情報統括が求められるようになったことが背景にあります。そのため、現在の私に与えられた職務は、医療情報部の先代の教授である永田啓先生がされていた附属病院のお仕事（医療情報部長）と、生命

科学講座(生命情報学)の元教授である小森優先生がされていた大学のお仕事(マルチメディアセンター長)を、ともに引き継ぐものとなっております。まだ慣れない仕事も多く、日々、周りのスタッフに支えられながらですが、非常にやり甲斐を感じております。

具体的には、病院情報システムの構築・導入・管理・運営、大学全体の情報基盤システムの構築・導入・管理・運営、そして医学科と看護学科における情報科学および医療情報学の系統講義、大学と附属病院における個人情報保護関連、さらには滋賀県下の地域医療連携ネットワーク「びわ湖あさがおネット」の業務等を担います。病院情報システムにしても、ただ単にシステムを構築したらオシマイではありません。医師として日常の診療も行いながら、医療情報を扱うことで、患者さんや現場の医

療者の目線で情報システムを提供できるように心掛けています。

研究については、私はこれまで循環器・不整脈を主なテーマとして、医療情報学、生体医工学、臨床医学、基礎医学の融合領域研究に取り組んできました。その実現のために、私は略歴にもございます通り、国内外のコンピュータ科学の関連施設にも足を踏み入れました。今後は、その経験を活かし、さらに昨今の人工知能、ICT、IoT、遠隔医療、ビッグデータ等を取り入れた医学研究、すなわち「IT-Medical構想」のもと、迫り来る医療情報革命に向けた新たな取り組みにもチャレンジしたいと考えております。もし、ご興味がおありの同窓の先生や大学院生・医学生がおられましたら、ぜひお声をかけてください。

[略歴]

- 1996年3月 滋賀医科大学 医学部医学科 卒業
- 1996年5月 滋賀医科大学 第一内科(医員研修医)
- 1997年11月 医療法人社団御上会 野洲病院(内科医員)
- 1998年4月 滋賀医科大学 大学院医学研究科 入学
- 1998年7月 国立循環器病センター研究所 疫学部(任意研修生)
- 2001年12月 独立行政法人 通信総合研究所 情報通信部門(研修員)
- 2002年3月 滋賀医科大学 大学院医学研究科 修了 博士(医学)
- 2002年4月 滋賀医科大学 呼吸循環器内科(医員)
- 2002年10月 米国留学:Tulane大学 生体医工学部(ポスドク研究員)、Tulane大学 & Xavier 大学コンピュータ科学センター(ポスドク研究員、兼任)
- 2004年4月 京都大学 医学研究科 細胞機能制御学(助手相当研究員)
- 2004年7月~2006年12月 Tulane大学 生体医工学部(Adjunct Professor)
- 2005年8月 滋賀医科大学 呼吸循環器内科・不整脈センター(助手)
- 2005年9月~2016年3月 国立循環器病研究センター研究所 研究機器管理室(客員研究員)
- 2007年4月 滋賀医科大学 呼吸循環器内科・不整脈センター(助教)
- 2012年4月 滋賀医科大学 呼吸循環器内科・不整脈センター(講師(学内))
- 2016年4月 滋賀医科大学 医療情報部(講師(学内)、兼任)
- 2017年8月 滋賀医科大学 循環器内科(講師)、医療情報部(講師、兼任)
- 2018年4月 滋賀医科大学 情報総合センター(講師、兼任)、マルチメディアセンター(副センター長、兼任)
- 2019年6月 滋賀医科大学 情報総合センター(教授)、医療情報部(部長、兼任)、マルチメディアセンター(センター長、兼任)

教授退任
ごあいさつ

定年退職にあたって



放射線医学講座 教授
村田喜代史



平成最後の年となった平成31年の3月に、私も20年間務めた滋賀医科大学放射線医学講座教授を定年退職させていただきました。振り返れば、国立大学の法人化や初期臨床研修制度の開始等、いろいろな出来事があった20年でしたが、無事に定年を迎えることができましたのは、医局の先生方、秘書さん、放射線部の技師さんや看護師さん、事務職員の皆様、各診療科の先生方、すべての皆様のご支援の賜物と心より感謝致しております。

平成11年10月に森田陸司先生のご退任のあとを受けて滋賀医科大学放射線医学講座を引き継ぐことになりましたが、実は、私は、それ以前の昭和63年からの10年は滋賀医科大学放射線部の講師、助教授として勤務し、さらに遡って、滋賀医科大学病院が開院した昭和53年からの3年半は放射線科助手として勤務していましたので、医師として過ごした人生の8割を滋賀医科大学で過ごしたことになります。開院当初は山崎武教授のもと、坂本力先生、藪本栄三先生に放射線科医のあるべき姿を厳しく教えていただきました。そして、京都大学大学院時代に伊藤春海先生のご指導のもとで呼吸器画像診断の研究を開始し、特に肺の高分解能CTを世界に向けて発信できたのは本当に幸運でした。

留学から帰国して、すぐに再び滋賀医科大学に戻ってきましたが、ちょうどそのタイミングで森田陸司先生が放射線科教授に着任され、それからの10年間は、森田先生のご指導のもと、各スタッフが主体性をもってのびのびと研究や臨床をやらせていただき、私は超高速CTを利用した新たな呼吸器画像診断法の開発を中心に呼吸器画像診断研究をやらせていただきました。

教授に就任した後、私は滋賀医科大学で目指す放射線科医の方向として、全身の疾患に対する診断能力を維持しつつ、専門とする領域では診療も研究も世界標準レベルをめざすこととしました。多くの先生が忙しい診療の中でも研究マインドを持ち続けて、最高峰の北米放射線学会での発表や国際学術誌への投稿を実現してくれたことを非常に嬉しく思っていますし、また多くの先生に留学経験をもってもらうことが

できて本当に良かったなと思っています。

初期臨床研修制度の導入以降、地方の大学にとって入局者を集めるのは厳しく、一方でCTやMRIの進歩によって業務量が激増し、マンパワー不足の問題をいつも抱えてやってきました。それでも、私の在任中に、47名の新入局員を迎え、それらの先生が後期研修後、滋賀県、京都府、大阪府の関連病院で勤務していただくことによって、地域医療に貢献するとともに、滋賀医科大学放射線科を基幹病院とする専門医研修体制をほぼ整える事ができたのは、私にとって大きな喜びです。

滋賀医科大学の中で、お世話になった、すべての方に改めて心からお礼を申し上げるとともに、滋賀医科大学の益々のご発展をお祈りしております。

本当にありがとうございました。



私の仕事場

地域で家庭医として働くこと ～Think globally, Act locally～



公徳社団法人 京都保健会 ふくちやま協立診療所 所長



京都家庭医療学センター
(KCFM:Kyoto Center for Family Medicine)

日本プライマリ・ケア連合学会認定医・指導医
認知症サポート医

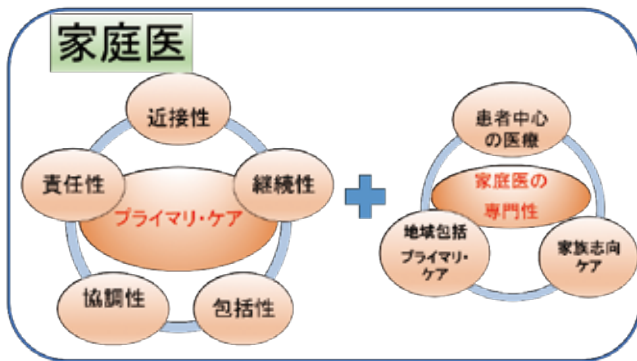
寺本 敬一 (医17期)

私は、現在、京都府北部の診療所に勤務しています。大学時代の思い出と、地域における家庭医の活動を紹介させていただきます。

ドイツ語授業では、日本語禁止に面食らいましたが、語学の楽しさを学ぶことが出来ました。ヨット部では、琵琶湖で、風速10m以上でかつ飛ぶなどかけがえのない非日常的体験ができました。西医体遠征、飲み会、蛍ツアー、卒業旅行(トルコ)など素敵な思い出は数多く、友人やヨット部の先輩方、後輩達には本当に感謝しています。一方、同級生が交通事故で、後輩が水難事故で急逝するという辛い経験もあり、彼たちの分までしっかりとした医師に成長して、医学、医療に貢献する責任があると感じています。

メルボルンで家庭医療研修を行い、2004年に京都府最北端の京丹後市にある診療所に赴任しました。患者さんの本当の受診理由を明らかにして満足度を高め、待ち時間も減らす効率的な診療を目指し、年齢性別領域問わずカゼなどよくある急性エピソードや、糖尿病などの慢性疾患管理を幅広くかつ、質の高い医療を提供できるよう勉強する毎日です。「先生の顔を見るだけで元気になれる」など言っていたこともあり患者さんの笑顔で癒やされています。24時間対応の在宅診療は正直大変ですが、感謝さ

(1)



れることも多く報われます。100歳の方の看取り後すぐ、0歳児の予防接種など命の始まりから最期まで関われる醍醐味もあります。多職種による「かかりつけ医ものわすれ外来」、「認知症学ぼう会」で地域の認知症ケアの質向上に貢献しています。実臨床では複数のSDH(健康の社会的決定要因)、精神疾患の合併などの困難事例に遭遇しますが、多職種連携で、最適の方法を模索、提供し、うまくいったときの達成感は大きいです。京都で最も早く家庭医養成の施設群を立ち上げ、多職種連携教育のセミナーを開催しています。住民対象の健康学習会も楽しんでしています。自分のやりたいことが、業務と一致して、非常に充実した日々を過ごしていることは本当に有り難いことです。

当地域も医療崩壊目前です。地域医療は、非常にやりがいのある素敵なフィールドです。大学病院で最先端の専門的治療、研究をしていただくのと同時に、かかりやすい診療所で質の高い診療を担う医師が増えて、役割分担ができるようになると日本の医療も更に良くなると思われます。

滋賀医科大学同窓生の皆様の御健勝、御活躍を心よりお祈り申し上げます。

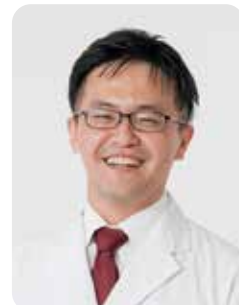


活動風景写真(2018 KCFM家庭医療学セミナーふくちやま)

私の仕事場

(2)

ハンドボール部出身消化器外科医の今



新東京病院 消化器外科
佐治 雅史 (医30期)

医学科30期生の佐治雅史と申します。平成22年に滋賀医科大学を卒業し今年で卒後10年目となりました。卒後3年目から国立病院機構 京都医療センターにて外科医師として勤務し、昨年10月より千葉県松戸市にある誠馨会 新東京病院にて消化器外科医として勤務しています。

当院は昨年10月より消化器外科各領域の国内トップクラスの指導医の先生方が集まり、卒後10年前後の若手(?)医師とともに消化器がん腹腔鏡・ロボット手術センターとして「低侵襲外科手術 (Minimum Invasive Surgery)」を積極的に行っています。本年4月からはda Vinciによるロボット支援下手術も本格的に稼働し、低侵襲で質の高い腹腔鏡・ロボット手術を提供しています。

国内に限らず海外でも多くの講演を行い、日々国内外の病院から多くの外科医が手術の見学にこられるようなエキスパートの先生方から、手術について多くを学ぶ毎日であり、また、他科やメディカルとの協力、地域の中核病院や開業医の先生との連携、目の前の患者さんとの関わりなどにもしっかりと目を向けた診療を心がけています。ご興味のある方は是非お気軽にご連絡ください。

さて、病院の宣伝はこのくらいにします。わたしは京都育ちで大学から研修医も滋賀県で過ごしその後また京都に戻りましたので、関東の見知らぬ病院へ異動することは不安でもありました。そんな中助けになったのは家族であり友人であり先輩後輩・同僚でありました。大学時代の友人や先輩後輩と会う時間は医

師として非常に刺激になりますし、今でも故郷の安らぎを感じる貴重な時間です。またハンドボール部で培ったハードな日々との向き合い方やチームワーク、時にバカになれることが今わたしの礎となっています。昨年は何年かぶりに西医体で優勝し、今年は初の滋賀医大が主幹の西医体が開催されます。これをご覧のハンドボール部のOB・OGの方々も一度覗いてみてください。彼らも頑張っています。

これからも母校への愛を忘れずに、日進月歩の医学の波に乗り遅れないように日々精進したいと思います。最後になりましたがこのように貴重な機会を与えてくださりありがとうございました。





おがわ耳鼻咽喉科医院 院長

小河 孝夫 (医23期)



開業しました

みなさま、お元気ですか。23期生の小河孝夫です。平成30年、滋賀県草津市に「おがわ耳鼻咽喉科医院」を開院し、1年が過ぎました。学生時代は、柔道部に所属し、敗北しても何度でも立ち上がっていくという精神性が鍛えられました。現在、柔道部は西医体で優勝するなど強豪校となり、後輩達が頑張っていることをうれしく思っています。柔道部の縁もあり、現在琉球大学耳鼻咽喉科の教授としてご活躍されている鈴木幹男先生にお誘いいただき、平成15年に滋賀医科大学耳鼻咽喉科へ入局しました。研修医1年目の時に清水猛史教授が赴任され、臨床と研究の体制を新たに構築される中で、私は、前任の中嶋大介先生から引き継いだ、嗅覚・味覚障害の基礎・臨床研究に没頭しました。三重大学や金沢医科大学など嗅覚分野で最先端をいく教室の先生方にもご指導いただきながら、嗅神経の再生や新規治療法の開発といったトランスレーショナルリサーチで、多少の貢献はできたかと思っております。開業後もライフワークとして、新たに得た知見は、自己満足で終わることなく、論文執筆し、形に残すことにこだわっていきたいと思っています。

さて、私の医院では、看護師、事務員と私を含めスタッフ8人で、平成30年に開業しました。開業を思い立てからは、何かの波に乗ったように話が進んでいきました。スタッフは皆、エネルギーで、雰囲気よい職場となっています。大学勤務時代と比べて、職員の採用や収支など、医院経営の仕事が増えましたが、今のところあまり苦にはなっておりません。しかし、診察する患者さんの数は大きく増え、昼休み休憩の時間も銀行へ行ったり、物を整理したり、レセプトを作ったりなど、労働時間は長くなり、何かと忙しく過ごしています。勤務医時代にはあまり関われなかった補聴器、めまい、アレルギー診療や鼻内視鏡手術(クリニックでできる範囲のもののみですが)を新鮮な気持ちで取り組み、楽しくやっています。



診察室



医院外観



流れ流れてニューヨーク

渡米から丸14年経った今年、コロンビア大学の肝胆膵外科とがん研究センターに着任しました。マンハッタンに位置するコロンビア大学はノーベル賞受賞者数世界2位を誇り、外科は、膵頭十二指腸切除術を確立した Allen Whippleが、かつて主任教授を務めた全米有数の膵臓外科施設です。アプガー指数を開発したコロンビア大学初代麻酔科長 Virginia Apgar は、外科手術発展のために麻酔科を立ち上げるよう Whipple から促された女性外科医でした。



Erkki, Eva とともに。週末のよくある光景。

思えば、20年前の滋賀医大卒業時から Surgeon Scientist への道を模索し始めました。徐々に道が拓けたのは、二人の恩師、サンディエゴのバーナム研究所元所長 Erkki Ruoslahti 博士と、コロンビア大学膵臓センター所長 John Chabot 教授との出会いによります。

Ruoslahti 博士は私の研究留学時のボスで、現在では共同研究者兼アメリカの父のような存在です。彼は、フィブロネクチン、最初のインテグリン、RGD 配列などを同定し、現在の科学の礎を築いたと言っても過言ではありません。ちなみに夫人は、かの ELISA 法を開発し命名した Dr. Eva Engvall です。Ruoslahti ラボで、私は運良く、腫瘍に薬剤を送達する iRGD ペプチドなるものを同定し、NIH などの研究費も獲得できたことで、自分のラボ



コロンビア大学 肝胆膵外科・がん研究センター
菅原 一樹 (医19期)

をバーナム研究所で立ち上げました。渡米後6-7年たち30代後半に差し掛かった頃でした。

その頃、私は無謀にも外科の再研修を目指し、Chabot教授に出会いました。Chabot教授は肝胆膵外科のチーフで、当時、臨床家や研究者を集めた膵臓センターを立ち上げたところでした。私は運良くその構想に合致し、コロンビア大学にてラボの主任と外科のカテゴリカルレジデントを兼任する案ができましたが、全米でも例がなく、米国卒後医学教育認定評議会と協議の上、大学がプログラムを改編し、実現するに至りました。今年、そのプログラムを修了し、肝胆膵外科医として手術や外来をしつつ研究をする生活が始まりました。

アメリカン・ドリームとは、今では億万長者になることとほぼ同義ですが、実際は、行動すればチャンスを与えられ、モノにすれば夢が叶うということに他なりません。私は道半ばですが、今しばらく、夢のために努力しようと思います。かつて同定したiRGDペプチドは、現在膵癌患者などで臨床試験が進んでいます。自分の開発した治療法で癌を治すという夢が、いつか叶うかもしれません。では、また世界のどこかでお会いしましょう。



膵臓センター待合室のAllen Whipple肖像画



Dr. Chabot と。膵臓センターにて



1



ウェストチェスターメディカルセンター・ニューヨーク医科大学
臨床外科准教授

十川 博 (医15期)

Why not?

ちょうど学生の時に読んだ、岸田明博先生の書かれた湖医会通信投稿文のタイトルが“Why not?”であった。私の投稿文のタイトルも“Why not?”にしようと思う。岸田先生は米国で一般外科研修を終えられ、ピッツバーグ大学で肝移植のトレーニングを終えた後に、滋賀医大第一外科に着任されたばかりであった。米国流の系統だった診療および教育方法に、多くの学生が影響を受けた。実際、滋賀医大から米国の臨床トレーニング卒業生を多数輩出したのは岸田先生の影響であったのは間違いない。

6年生の夏にUSMLE (米国医師国家試験) の勉強を始めた。卒業後に在沖縄米海軍病院でインターンシップし、東京女子医大消化器病センター外科で医療練士となり、卒後4年目にハーバード大学・マサチューセッツ総合病院移植外科で研究留学をして、運良く、その後ニューヨーク州立大学ストーニーブルック校で外科のレジデントになることができた。そこでの5年間の研修の後、マンハッタンのマウントサイナイ病院・アイカーン医科大学で多臓器移植外科、肝胆膵外科のフェローシップをし、スタッフとして残り、移植の聖地ピッツバーグ大学に移動した後、現在のウェストチェスターメディカルセンター・ニューヨーク医科大学で肝腎移植および肝胆膵外科の臨床、教育、研究に従事している。

何故、米国で外科医になることができたのかといえば、諦めなかったこと、周りの人からのサポート、そして、運の良さにつきるだろう。現在においても、米国で臨床研修をする意味があるのかといえば、間違いなくあるだろうと思う。もちろん、日本の医療レベルは大したものだし、世界に誇れる分野があまとある。しかし、こと医学生教育およびレジデント研修においては米国が明らかに勝っていると言える。もちろん、超優秀な人はどこで研修しても一流になれると思うが、そうでない大部分の医師にとっては、研修でかなり差が分かれるように思われる。英語が心配?大丈夫。生粋の日本人の僕にでもできたのだから。Why not?



滋賀医科大学家庭医療学講座
総合診療部・初期診療科 特任教授

松村 一弘 (医11期)

滋賀医科大学を取り巻く変動の時代 ～ちょっと振り返ってみて思うこと～

1974年に滋賀医科大学が開講、1978年に滋賀医科大学医学部附属病院が開院し、もうすぐ半世紀が経とうとしています。そこで私なりに滋賀医科大学のことをちょっと振り返り思うことを述べたいと思います。

私は11期生として1985年に入学いたしました。当時大学周辺には瀬田駅にロッテリアとヒカリ屋がありましたが、今のようにフォレオやアルプラザ、当然ヒカリ屋の後にできた現在のイオンありませんでした。このように周囲に遊べる環境がなかったため、昼は大学でクラブ活動、夜はクラブの先輩・後輩や同級生と酒盛りで過ごしていました。クラブは野球部に所属し、当時6年の夏の大会まで野球をやるのが慣例(OBの意向より)となっていました。私が6年生の時は部員の関係もあり秋季リーグまでやらないといけなくなっており、国家試験対策などは正直ぎりぎりで、今思えば無謀な学生時代であったなあと思います。

しかし現在大学でのカリキュラムは、国際認証、CBT、OSCE、post-OSCEやクリニカルクラークシップとでぎっしり詰まり、5年生の夏休みは約1週間しかないような状況になっています。また、大学卒業後の初期臨床研修には病院マッチングが必要であり、研修先の施設見学等で

忙しすぎる学生生活になってしまっています。そのうえ初期研修後には日本専門医機構の専門医制度が待ち構えられ、今度は専攻科及びどこの専攻プログラムを選択するのか考えないといけないという状況で、我々の時代より複雑なうえ多忙になっています。

一方、少子化により国立大学の改革が推し進められている状況で滋賀医科大学も変革を迫られる時代に入っています。このように大学医学部および医師研修を取り巻く環境は変動し、若い学生及び研修医にとってどんどんやりにくく複雑になってきているように個人的に感じます。ただ学生時代にしろ、研修医時代にしろ、先輩から学ぶことはいつの時代になろうとも変わらないように思います。私も先輩から多くの事を学ばせたもらったことは今の礎になっています。

ですから大学も半世紀近く経ち多くの同窓生を輩出しているので、同窓生として先輩・後輩の交流がもっと充実できれば、学生生活はもとより、仕事面でもお互い何かのメリットがあるのではないかと。この度湖医会にポータルサイトが立ち上がったことで、湖医会に同窓生がどんどん集まり、交流の機会が増えていければと思うこの頃です。



同期会



卒後10年同期会に参加して

広島市立安佐市民病院 血液内科 高橋 香織 (医28期)

皆様、こんにちは。28期の高橋香織です。現在、広島市立安佐市民病院の血液内科でパート勤務をしております。今回、同期会に同級生の夫とイヤイヤ期真っ最中の2歳息子と参加しました。

会場では、名簿順に、昔の写真の前でスピーチをしました。

昔の写真のかわいらしいこと!でしたが、現在の本人も皆、さほど変わっておらず元気そうで、楽しく話を聞かせてもらいました。昨今、女子学生の医学部入試差別が話題になっていますが、それとは無縁であろう我が母校の同期会は女性も多く華やかでした。若干名、横に成長したり、髪形やメガネが昔とずいぶん違うなと感じる方もいました。関西で働い

ている人が多かったですが、関東方面も多くて驚きました。渡邊君の昔と変わらない口調のスピーチを聞きながら、いつも渡邊君の話をニコニコしながらK君が横で聞いていたのに、と思うと、とても悲しかったです。

もっと皆と色々話したかったのですが、予想通り子供に振り回され、会場と外とを行ったり来たりで、落ち着いて話す時間なく終了してしまいました。(夫は、すぐに出来上がって戦力外、)個人的には、一緒に学士入学した友人に10年ぶりに会え、その間の話を直に聞いたことがうれしかったです。幹事の方々、ありがとうございました。

過ぎてみると10年はあっという間でした。次回は20年目でしょうか。また会いましょうね。今回来られなかった皆様も次回はぜひお会いしたいですね!



卒後10年同期会の「当たり」

高橋 雪輝 (医28期)

前泊していた三条京阪からベビーカーに全く優しくない京都の地下鉄に戸惑い、ようやく夫婦で会場のグランビアに着いたのは開始時刻を過ぎた最後。受付にはくじが置いてあり、引くと「当たり」が。そう、この記事への強制投稿権が「当たり」ました。そのとき隣にいた幹事の典明(仮)は、「さすが、やっぱ持ってるなあ」で。そんなん嘘やん!、ババしか残ってないババ抜きやん! はめられたわー、と思いつつ、同窓会はとても楽しかった。その意味でも当たりだった。

殆どの同級生と10年振りの再会。変わらない人、ちょっと太った人、かなり太った人、髪が寂しくなった人、綺麗になった人、すごく綺麗になった人。みんなと話したかったけれど、あっという間で話しかれな

かったのが残念。おまけに俊平(仮)からは当時と変わらずボンクラ呼ばわり。それなのになぜだ、なぜこんなに嬉しいんだ。そうだ、記憶力がボンコツになった31歳で再入学したこのボンクラが、ちゃんと卒業して自分なりに精神科医を天職と思いながら仕事ができてる。それもこれも医学部時代に助けてくれた寛容なこの同級生たちがいたからだ。そして、妻子を広島に残し単身沖縄に行くボンクラ行為を許してくれた寛容な妻も、やはりこの同級生なのだ。

次に大々的な同窓会が行われるのは10年後か。そのとき僕は58歳。身体的にいろんなガタがきてそうだが、働き盛りの同級生たちがいるから安心して飲める。

10年後もこの記事を書きたい、だから典明、また遅れていくから「当たり」は残しておいてくれ。



同窓生との10年ぶりの再会

千船病院救急診療部 山下 公子 (医28期)

卒業後10年の節目の同窓会。卒業とともに大阪に移った自分が同窓会に参加しても、覚えてくれている人はいるかしら?と不安を胸に参加しました。しかし、会場入り口でさっそく同窓生に声をかけられ、フラッシュバックのように大学時代の記憶が一度によみがえってきました。受付や会場で続々と同窓生を見かけるごとに、懐かしい思い出が沸き上がり、気持ちまで若返る思いでした。私は大阪に移ったことで、同窓生と出会う機会もほとんどなく、卒業以来10年ぶりに会う人ばかりでした。10年という月日を全く感じさせない人、逆にびっくりするほど変わっている人、それでも学生時代の面影を見つけてとても懐かしく感じました。

スピーチの際に、背景に滋賀医科大学入学試験願書の顔写真を映し出されるという罰ゲームのような、でも盛り上がる趣向が凝らしており、高校を卒業したてのころから医師という過酷な仕事を始めるまでの、貴重な時間を滋賀医科大学の同窓生として一緒に過ごしたんだなあと感じ入ってしまいました。そしてそれぞれの分野で、子供がいたりいろいろ大変な中でも活躍している同窓生の話を聞くと、自分もますますがんばらないと、と気が引き締まる思いでした。また10年後、卒後20年目の同窓会が開催される予定ですが、そのころにはみんなどうなっているのでしょうか。誰か滋賀医科大学の教授になっているかな?その日を楽しみに、また日々がんばっていききたいと思います。



同期会

卒後20年同期会に参加して『おい!高橋!!』

佐伯 啓介 (医19期)



皆さんこんにちは。医学科19期卒業の佐伯啓介と申します。縁あって(何気なくとった棒の先に色がついていただけですが)18期生卒後20年同窓会のレポートを書くこととなりました。在学中は再試験やレポート提出をさんさん経験した挙句留年した私に、またまたレポートを書く機会を与えていただき感謝です。

参加者は43名で中には東京や九州からという人も。10年会には参加できずに20年ぶりという人もいました。会に先立ち、3名の物故者へ黙祷を捧げました。幹事の津川さんからのクールな挨拶があり、哲信の名調子で和やかに会は始まりました。そう、最初は和やかだったのです。

久しぶりに会うかつての同級生たちは、みなそれほど体型も変わらず、極端に老けたなあと思う人はいませんでした。女性陣はみなさんとてもおしゃれて、その美魔女、いや美女っぷりは目を見張るものでした。

前後半に分かれて行った自己紹介では、教授になるかもしれない、いやなってやる!、最近開業した、新薬を開発している、体調を崩してしまったなど、壮年期にふさわしい(?)話題もあれば、まだ1-2歳の子供がいる、最近結婚したという若々しいお話もありました。

会が始まってしばらくしたころ、主役が登場しました。そう、高橋邦彦その人です。スターのごとく現れた彼は、ほぼすべての自己紹介におもしろおかしくコメント、その高橋に向かって哲信が“高橋、うるさい!!”とつつこむという、学生時代と全く変わらない光景が幾度となく繰り返されたのでした。そして満を持して舞台に上がった高橋、事前に熟考してきたと思われるネタを披露したのですが、中村紀洋の空振りばりの大すべり。“あれ、受けると思ったのになあ、ははっ”。

そうです、20年たっても、立場がどれほど立派になっても、人はそうそう変わらないのです。

樋口が言いました。“学生時代を思い出せるような容姿で会えるのは今回が最後じゃないでしょうか”。

果たして30年会ではどのような姿の皆さんと再会できるのでしょうか。そうそう変わらないのでしょうか?10年ごとって絶妙だなあ。

私は二次会には不参加でしたが、やはり高橋の独壇場だったようです。

『おい、高橋!、うるさい!!』



18期生

卒後20年同期会に参加して



市立野洲病院 外科部長
佐藤浩一郎 (医18期)

湖医会の皆様、こんにちは。18期生の佐藤浩一郎です。現在、市立野洲病院で働いています。平成31年3月2

日に滋賀医科大学医学部医学科20周年記念の集まりのため琵琶湖ホテルに行ってきました。今回は43人の同級生が集まりました。最初に写真館で記念撮影がありました。鬼籍に入った3名の同級生に黙祷をささげたのち会が始まりました。半分ぐらいの同級生は20年ぶりに会ったのですがすぐに全員わかりました。青春時代を共に過ごした同級生との会話はやっぱり楽しいですね。美味しい食事を頂き、歓談中に1回生と6回生の時の写真の前で近況を報告しました。この写真の前で私が去年結婚したことを報告しました。みんな祝ってくれました。本当にありがとうございます。近況報告のなかで、数名の同級生は命に関わる病気にかかったとのこと。10年後の30周年の集まりに参加するので健康に気をつけようと思いました。20周年記念の集まりの準備運営をしてくださった湖医会事務局の皆様、幹事の山根先生、及び当日撮影をしてくれた写真部の学生の方、本当にありがとうございます。今回20周年記念の集まりは参加して本当に良かったです。青春時代を共に過ごした同級生は大切にしましょう、っていうメッセージを学生さんには送りたいです。滋賀医科大学の益々の発展を願っています。



堺市立総合医療センター
耳鼻咽喉科・頭頸部外科

長井 美樹 (医18期)

2019年3月2日に卒後

20年同期会に参加し、楽しい時間を過ごしてきました。10年ごとの同期会は大阪で暮らす私にとって、旧友たちに会える貴重な機会。心待ちにしていました。

さて、当日大阪駅から電車に乗り込むと仲良しのあっちゃんと偶然同じ車両ではないですか。ラッキーでした。2人で楽しく会場に向かいました。会場に到着すると懐かしい面々が歓談する(興奮する?!)声が響いていました。あ～この雰囲気、いいな～。「久しぶりー!変わらないねー!」など声を掛け合って着席。学生時代そのままのノリにちょっと恥ずかしいような妙な幸せを感じます。今回は43名が出席しました。

会に先立ち、3名の物故者に黙祷しました。恒例の近況報告のコーナーでは、学生証の写真と卒業アルバムの写真の横に並んでスピーチです。びっくりしたことに7割ぐらいの人は容姿がほとんど変わってない!え～!卒後20年経ってもみんな、若いな～。スピーチは本当に聴きごたえがありました。前のテーブルの高橋くんがスピーチごとにその都度面白い合いの手を入れ盛り上げてくれたのでずっと大爆笑でした。全員のスピーチ内容は書き切れませんが、割合的には仕事(開業した、教授になるかも?、専門分野のことなど)の次に家庭(PTA会長になった!、結婚、離婚、子供のことなど)そして健康問題(実は大きな病気になったが克服したなど)が報告されました。卒後20年にもなると話題は尽きないものですね。ほとんどの人がそのまま2次会に参加しました。最後は名残惜しく、山根君の一本締めでお開きとなりました。同期会、とても楽しかったです。卒後20年経った今も滋賀医大18期生で良かったと強く思います。次回は卒後30年同期会で2029年ですね。また皆元気で集まりたいです。

最後になりましたが、司会進行の労をとってくださった山根君、幹事の津川さん、また写真撮影をくださった写真部の学生さん2人もありがとうございました。そして素敵な同期会を提案してくださった湖医会事務局に心より感謝します。

同期会

8期生

卒後30年同期会

井上 慶郎 (医8期)



去る、3月2日に、「琵琶湖ホテル」にて、8期生卒後30周年同期会が執り行われました。参加者は43名でした。

定刻の6時より、幹事の乾、内田両先生の司会で始まりました。冒頭、先日急逝された、物故先生への黙とうを全員でいたしました。



その後、乾杯をし、しばし食事しながらの歓談の後、「あいうえお順」で、一人ずつの近況報告が始まりました。ほぼ皆、10年振りの再会でして、卒後30年ですので、50歳代後半から60歳代ばかりです。顔と名前がすぐに分かる人から、10年間で大きな変化(小生を含む中年太り・毛髪など……)を遂げているので、話を聞いているうちに、やっと認識出来る人まで様々でした。

お話の内容も、どなたも興味深い話ばかりで、感心したり、思わず吹き出しそうになったり、とても楽しいものでした。10年前から更に活躍をしていることが当然多く、〇〇大学の教授になったとか、大病院の副院長になったとか、開業が上手く行っているとか…ですが、今回特別なものがいくつかありました。それは自らのことではなく、家族についてのことです。「孫が生まれた」というもの。これは10年前にはなかった報告です。それから印象的だったのは、「自分の子が医師になり、今、同級生の〇〇先生が指導医です」というもの。これには驚きました。でも十分あり得ることなんですねえ。それだけ医者之长くやっていれば……。楽しい話も43人終わると、もう2時間になりそうでした。最後の挨拶、記念写真を済ませ、次回の再会を誓い、2次会へと向かいました。10年後が楽しみです。



鹿児島支部会を開催

愛甲医院 院長 迫田 悟 (医1期)

滋賀医科大学5期生である西尾善彦先生の鹿児島大学大学院糖尿病・内分泌内科学教授就任を機に、滋賀医科大学同窓会鹿児島支部会を発足してから早いもので8年になります。

西尾先生が赴任されてから鹿児島大学に糖尿病を専門とする教室が誕生し、糖尿病関連の講演会の回数が増え、新しい知識を勉強する良い機会になっています。

3期生である中野静雄先生に南九州最大の繁華街である天文館の一角にある割烹『白鹿』を予約していただき、令和元年5月18日土曜日、第6回滋賀医科大学同窓会鹿児島支部会を開催いたしました。

今回は、いつもご出席くださる先生の学会発表などの日程と重なってしまい、また、他の先生方との連絡もうまくいかず、4名のみの参加となりました。

西尾善彦先生の乾杯のご発声で会を始めました。料理に箸をつける暇もないくらいに話が弾み、あっという間に終了時間となってしまいました。

二次会は天文館にある静かなBarで、ソムリエの方の解説を伺いながらおいしいワインを堪能しました。また次の支部会での再会を約束して、家路につきました。



訃 報

謹んで哀悼の意を表します。

平成 30 年 10 月 7 日

鈴木 昭文 (医 4 期)

湖医会ポータルサイト開設

カレンダー機能、コミュニティ、情報交換、同級生や会員への近況報告などの情報発信、
質問コーナー、就業支援、大学の情報発信など

配布済のIDでログイン 登録にてすぐに利用可能!!

問い合わせ／e-mail : koikai@koikai.org

湖医会広報

会員の現況 (8/1現在) 総数 6,787名

●卒業会員 { (学 部) 5,317名 (医 学 科 3,824名
看護学科 1,493名
(大学院) 15名

●学友会員 ————— 107名

●在学会員 1,050名 (学部 : 932名、
博士 : 91名、修士 : 27名

●特別会員 ————— 298名 (元職員231名
現職員 67名

年会費について

医学科卒業会員・特別会員・賛助会員

会費の割引…自動引き落とし(口座振替・VISAカード)の利用者は、
年会費6,000円が5,000円に割引となります。

医学科卒業会員

会費の免除…40年(40回)分を納入したとき、あるいは、満65歳に達し
それまでの会費を完納しているとき(本人からの申し出による)
は、以後の会費は免除となります。

お知らせ

「湖医会」年会費の

自動引き落とし



口座振替をご利用の方は10月12日、
一般VISAカードの方は10月15日となります。
なお、便利な口座引き落としの利用をご希望の方は
事務局までご連絡ください。

名前・住所・勤務先・メールアドレス等が変更になった場合は、メー
ルまたはファクスで事務局までご連絡ください。



表紙の写真：中庭からヒポクラテスの木（撮影：学生写真部）